

口の周りはただれ、舌にはにきびのような白い点々が無数にあった。転落してから、母乳もほとんど受け付けず、食べ物も口にしていなかった。そこに、1歳9カ月のファトゥマタが泣きながら通り過ぎた。野菜畑で水やり仕事からなかなか帰ってこない母親に痺れを切らし、無謀にも畑に向かおうとしていた。おなかが減っているためか泣いている。泣きながらパタパタと小走りで駆けて行く彼女を、姉が連れ戻そうと追いかける。息子の

口をこじ開け、バライロ紅茶を流し込んでいたお母さんが2人を呼び止める。「息子がおっぱいを飲んでくれないから、お乳が張って痛くって。」姉がファトゥマタを抱き上げ、ベンチの上に座らせる。ファトゥマタは怪訝な顔ひとつせず、四つん這いになって異母の母乳を飲み始めた。彼女は左右の母乳を堪能し、満足そうに姉に連れられて帰って行った。シンキローを超えた共食の極みを見た気がした。

「気づき」がもたらすもの

—あるインドネシア人女性のエンパワーメントのはなし—

竹 安 裕 美*

インドネシア・南スラウェシ州のジェネボント県をはじめて訪れたのは2003年の7月のことだった。当時私は某独立行政法人の海外ボランティアとして北スマトラ州のとある村に赴任していた。村人の生活改善を目指すプログラム作りとその実施という、開発協力に従事する者には一見やりがいがあるように思えるが、その実、漠然とした目的の職務になっていた私は、当初の鼻息の荒さもどこへやら、なかなか思うようにいかない仕事の突破口を求めている。

そんな折、かつて日本での仕事を通して知り合いになっていた南スラウェシ州で活動するNGOのスタッフであるA氏とジャカルタ

で偶然再会した。久しぶりの再会に大喜びするとともに、内心忸怩たる近況を話しながら、私は南スラウェシでの活動を見学させてほしいと頼みこんだ。強引な私の申し出を受けて、A氏が連れていってくれたところがジェネボント県であり、そのとき紹介してくれたのがNさんという女性だった。

Nさんは当時30歳で、村の女性としては珍しく独身だった。北スマトラの村では30歳をこえた独身女性に出会うことがなく、心のどこかで寂しい思いをしていた私は、インドネシアではじめて出会った同年代の独身女性に親近感をもった。A氏とともに突然訪問した日本人の私を、彼女は快く迎えてくれた。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真1 塩田の様子

乾燥地帯の沿岸部では塩作りは主要産業のひとつ。かなり内陸まで海水を引き込んでおり、広大な塩田が広がる。



写真2 内陸高地部の様子

沿岸部と異なり棚田や段々畑が広がり、景色が一面の緑に変わる。

ジェネポント県は、漁業やテングサの養殖、塩田による塩作りを生業とする沿岸部、稲作やトウモロコシ栽培をおこなう内陸平野部、それに野菜やコーヒー栽培が盛んな内陸高地部の3つの地域からなる。このうち県面積の8割近くをしめる前2者が、南スラウェシ州で経済的にもっとも貧しい地域になっている。その背景には、乾燥した気候に代表される自然環境、灌漑施設の未整備、土地無し層が多いことによる社会的要因などがある。だが、同地では国内外からの貧困削減のための援助プログラムが数多く実施されており、現在でもオーストラリアのAusAID(オーストラリア国際開発庁：The Australian Agency for International Development)、世界銀行などが大掛りなプログラムを展開している。

Nさんの家は沿岸地域にあったが、両親は農業を細々と営んでおり、両親、妹、従妹と住むこじんまりとした高床式の家は質素な造りで、そこから彼女たちの経済状況をうかが

い知ることができた。彼女は、NGOのさまざまな教育プログラムを通してリーダー的素質を開花させた女性グループのリーダーであり、ヤギ銀行(ひとつのグループにつがいのヤギを支給し、飼育担当者は子ヤギが生まれたら1頭を自分のものに、残りを他のメンバーに分配し回転させていく、というもの)やマイクロクレジットを運営していた。NGOのプログラム自体は1年前に終了していたのだが、その後も近隣の活発なグループとともに活動をつづけ、ついにはいくつかのグループと共同で新たに協同組合を設立し、マイクロクレジットを中心に規模を拡大させていた。

彼女はグループの活動を知りたいという私の要望にこたえ、自分のグループの活動内容を失敗談もふくめて話してくれたり、他のグループメンバーの家へ連れていってくれたり、自分たちで立ち上げた協同組合の事務所に案内してくれたりした。北スマトラの村では見たことがなかった村人によるグループ活



写真3 共同組合の事務所にて

マイクロクレジットの帳簿を見せてくれるNさんとメンバー。帳簿づけはNGOのトレーニングで学んだスキルだという。



写真4 カーテン作りのコツを教えるNさん

近所の女性メンバーがわからないことをたずねにきていた。今もこうしたささやかな活動を続けているのだろう。

動を実際に見ることができ、そして何より、実際に自分たちで活動をおこなっている村人たちに会えて、私は興奮しっぱなしだった。

Nさんの村から戻って、私はその報告のためにNGOの事務所にでかけ、Nさんたちの活動に非常に感銘を受けたことを話した。そして、彼女たちの行動力の源は一体何なのか、とA氏にたずねてみた。その質問を待っていましたとばかりに、A氏は嬉しそうに一言「サダール sadar (気づいたんだ)」と答えた。

彼によると、彼女は一連のNGOの活動を通して自分の可能性、すなわち「自分は何もできない無力な人間ではないんだ、自分でも今の生活を改善できる」ことに「気づいた」のだという。ひとつのことができるようになると、それが自信となって次のことに挑戦し、それができるようになるとさらに自信がつき、活動が広がっていく。自分の「できること」がひとつひとつ増えていくことが喜びとなり、それが原動力になっているのだという。この「できること」が増えていく過程

が住民参加型村落開発プログラムでもっとも大切な「エンパワメント」のプロセスであり、NGOの使命は「気づき」をもたらし機会をできるだけたくさん提供することにあると、A氏はたくさんの実例をあげながら話してくれた。

「エンパワメント」とは何だろうか。最近学んだわかりやすい事例を紹介しよう。広い草原に1匹の鹿を連れてきて、透明な壁で鹿を囲ってしまう。すると鹿は囲いに気づかず何度か壁にぶつかって痛い目にあう。そのなかで鹿は壁の存在を体得し、壁にぶつからないように行動しはじめる。そうになると、壁を取り払っても、鹿は壁があったところから外に出ようとはしない。しかし、もし鹿が壁の不在に気づけば、ふたたび広い草原を自由に走りまわることができるようになる。こうした「気づき」によって行動できるようになるこそがエンパワメントである。Nさんと彼女の仲間たちは、それまで無意識のうちに自分たちの行動を制限していた見えな

い壁をのりこえ、行動の範囲を広げていっているのである。事実、Nさん自身、グループのリーダーとなったり、大勢の人を前にして話すことなど、以前では考えられなかったことだ、と話していた。

最初の出会ってから3年後の2006年、私は別の仕事で彼女と再会する機会にめぐまれた。協同組合の活動は3年前より縮小していたが、数名の活発なメンバーとともに貯金活動をつづけていた。さらに驚いたことに、彼女はAusAIDのプログラムにローカル・ファシリテーターとして採用され、隣村でのプログラム責任者となっていた。かつてNGOスタッフが彼女にしていたように、今度は彼女が近隣の村々の女性たちに働きかけ、グループ活動を勧めていた。時間的制約から彼女の活動先を訪れることはできなかったが、ますます精神的に活動を展開している彼女を頼もしく思い、話を聞きながら何度も「すごいすごい」と連発していた。そんな私に彼女は照れながら「私はNGOのおかげで人前で話もできるようになったし、自分たちの暮らしを自分たちで改善できることを知った。かつての私のような女性たちに、私のようにしてほしいと思って活動をしているだけだ」と語ってくれた。そんな彼女は3年前よりもさらに貫禄が増し、地域の女性から頼られる存在になっていた。もっとも驚いたことに、彼女はこの3年間に結婚し、元気な男の子を授かっていた。しかもレンガ造りの立派な新居を近くに建設中であった。公私ともに充実している彼女をととても誇らしく思った。

その後2007年の夏に私は再度ジェネボン



写真5 母となったNさん
最愛の息子とともに。

ト県を訪れた。今回はこれまでと異なり、大学院生としてフィールド調査をするためである。今回は「グループ活動がうまくいっていない地域」を調査することが目的だったため、Nさんの村とは別の村を調査地を選んだ。でも同じ県内だからきっと彼女を訪れる機会はあるだろう、とあまり気にせずにいた。

調査村へはA氏の妹でAusAIDのプログラム・マネージャーをしているFさんの案内でむかった。Nさんと同じプログラムだったので、私は彼女のさらなる活躍ぶりを知りたくて、Fさんに様子をたずねてみた。するとFさんは私の質問に困惑したように顔を曇らせしばらく黙っていたが、やがて「彼女はAusAIDから解雇されたのよ」と静かに答えてくれた。

彼女によると、NさんはずっとAusAIDのローカル・ファシリテーターをつづけ、昨年にはシニアレベルのファシリテーターとして

新人ファシリテーターを指導する立場にまでなっていたという。ところが、これまで非常勤だった小学校教師の職が今年から正規雇用になり、そちらの業務が増え、ファシリテーター業務に支障をきたすようになってしまった。状況は目を追うごとに悪化し、ついに数ヵ月前にAusAIDから解雇されてしまった、ということだった。

正規の教師になるのは狭き門だと聞いていたし、正規雇用は終身雇用を意味し、退職後の年金が保障されている。いつプロジェクトが完全撤退してもおかしくないAusAIDとの契約と比べれば、Nさんが正規の教師になったことはとても喜ばしいことであり、彼女の選択も理解できる。しかし、この事実を私はなかなか受け入れることができなかった。

おそらく、村落開発に関わりつづけたと思っている私にとって、Nさんは「エンパワメント」の実践者であり、いつからか私の活動の目標になっていたのだろう。それ故、彼女はずっとファシリテーターをつづけるものだとは勝手に思い込み、エンパワメントの辿りついた先が教師という、村落開発と直接関係のない職業である事実になんてできなかった。

結局、ジェネポント県滞在中にNさんの村へは行かなかった。彼女とは携帯電話で話をしていただけだった。彼女は相変わらず元気になっており、AusAIDのことは残念だったが教師の仕事の傍ら協同組合の活動はつづけているとのことだった。会えなかったことをとても残念がり、新居はすでに完成したから今度来る時にはかならず泊まりに来てと言ってくれた。

電話を切ったあと、変わらぬ友情で接してくれる彼女に対して失望感を抱いた自分が恥ずかしくなった。彼女はファシリテーターではなくなってしまったが、以前と同様、精力的に日々を過ごしている。エンパワメントが彼女にもたらしたものは消えることなく彼女のなかに存在しつづけているのだろう。正規の教師になれたのもエンパワメントの成果かもしれない。私はようやくこれも現実、と考えられるようになり、自分の勝手な感情から彼女に会わなかったことを深く後悔した。

次のジェネポント県滞在の際にはかならずNさんの新居に行き、彼女といろんなことを語り合おうと思う。そして彼女のパワーをまたわけてもらおうのだ。